

# 『グルマンディーズ』

## －翻訳と注釈（２）－

金山 富美

### はじめに

前号（『島大言語文化』第40号）に続き、フロラン・ケリエの『グルマンディーズ－ある大罪の歴史－』（*Gourmandise – histoire d'un péché capital*, Florent Quellier, Armand Colin, 2010）を訳出する。第一章では、「もの食う口」、つまりグルマンディーズの問題が、西欧ならではの宗教的世界観のもとで誕生した経緯を述べ、それが色欲と相まってもっとも根源的な人間の欲望であるとみなされたことから、教会によって七大罪のなかでも特に警鐘を鳴らす罪科とされたことを、様々な表象とともに解説した。

以下、第二章では、13世紀から16世紀末まで、詩や絵画にしばしば取り上げられた「楽園の国」という主題を通して、グルマンディーズが分析される。たとえば、わが国でも『怠け者の天国』としてよく知られるブリュエルの作品だが、原題は *Het Luilekkerland* であって、「怠け者」という意味が直接示されているわけではない。フランス語では *Le Pays de Cocagne* と表現され、やはり「怠け者」を意味する言葉は含まれない。英語では、通常 *The Land of Cockaigne* と表記され、*Country of the lazy and gluttonous*（怠け者と<sup>グルトン</sup>大食漢の国）と副題がつけられる例もある。第一章で「より恐ろしい他の悪徳を誘発する小罪」と定義されたグルマンディーズだが、「楽園の国」が様々な機会に人々の目や耳に触れるようになった時代になって、怠惰と強く関係づけられたということになるだろう。

同じ七大罪の一つに数えられるが、怠惰は身体的なグルマンディーズとは違い、精神的な罪であることも忘れてはならない。ケリエは本章で、「楽園の国」という表象にグルマンディーズと怠惰との結びつきを指摘しながら、その主人公として描かれた民衆の夢と、その憧れに隠された階級のおよび社会的状況も詳細に説き明かす。読者はまた、「楽園の国」を数多く多様な形で表現したその時期が、封建社会が解体しつつある頃と重なり、同時に、まだ表には現れないながら、後に資本主義と呼ばれる状況を準備する段階

であったことにも気づかされるだろう。人々の美味への欲望は、こうしてますます増長し、グルマンディーズの罪もあらたな形で継承されていく。

\*\*\*\*\*

楽園の国のグルマンディーズ

来たれ、思い煩うことなき人、<sup>ほらから</sup>同胞よ、  
 労働などまっぴら御免なそちら様、  
 脂がのった美味しい肉に目がない友よ、  
 不快、欠乏は大嫌いな方々、  
 締め屋たちから常々、  
 不精ではなく心広き御方と呼ばれているみなさん、  
 さあ、ともに楽園の国に行こうではないか、  
 眠れば眠るほどたっぷり得るものがあるという、その国へ。

『楽園の国への愉快な旅』<sup>i</sup> (1588, イタリア)

うらかな日、腹いっぱい堪能したらしい、ぼつてり太った大食家三人が、だらしなく、木陰でまどろんでいる。別の一人はタルトを一杯に並べたひさしの下でじりじりしている。数珠つなぎのソーセージが地所の垣根をなし、足の生えた殻つき卵がその身をゆらしながら、眠る三人に食べてもらおうと進み出れば、丸焼きの仔豚はわが背肉ともも肉を切りとってほしいとでもいう風情、炙り焼きされた鳥は銀の皿に横たわって首を差し出している。木々でさえ食べられるものばかりだ。灌木にはガレット菓子、低木に蜂蜜壺が実っているのも見える。そして遠くには、牛乳をたたえた湖とクレープ生地の方が、この情景をまとめている。四人の男たちは身体を動かすことなく、た



<sup>i</sup> *Il piacevole viaggio di Cuccagna* の一部。原文は以下の通り: « Venite spensierati e compagni, / Voi ch'avete sì in odio il lavorare, / Amici delli grassi e buon bocconi, / Nemici del disagio e del stentare./ Omini di gran cor, non già poltroni,/ Come gli avari vi voglio(n) chiamare, / Venite tutti, che andiamo in Cuccagna,/ Dove chi più dorme più guadagna.... »

だ口を開け、料理の到着を待つ。のどかなこの国では、食べ物は額に汗して得るものではなく、自然から直接与えられ、それを手にとるのに身をかがめる必要さえないのだ。1567年にペーテル・ブリューゲルによって描かれた『楽園の国』<sup>ii</sup>を活気づけるのは、人ではなく、食べ物や器である。仔豚は、祭のファンダール踊りのように大きく旋回をはじめる。そのカーブに沿うように、聖職者の外套と腹のベルトが曲線を描く。その線は、百姓の竿と背中丸み、さらに騎士の槍へとつながって、ソーセージの垣根で円を閉じる。木の幹が丸い盆を貫通し、盆をまるで時計のように回転させて、いつでもお好きな時にお食べください、といわんばかりだ。この国は、まことに結構なもてなしをする。なぜなら、旧体制下の伝統的秩序をなす三つの社会階層、つまり書物を携える聖職者、槍を備えた騎士、そして竿をもつ百姓のいずれをも、締め出したりはしないのだから。この国は、現実の社会とは反対の、理想郷を示している。万人が平等に美味を享受できることにとどまらず、豊穡で寛大な自然に救済されているから、何らやましい思いを抱くことなく、怠惰とグルマンディーズに身を任せることができ、食養生や道徳、あるいは宗教的などがめ立て一切を被ることもない。ここにいるのは、映画監督イヴ・ロベールが『幸せ者のアレクサンドル』<sup>iii</sup> (1967) に描いた、われわれの先祖そのものである。楽園の国を語るのなら、安逸をたたえる次の詩句で始めるべきだろう—「楽園の国では、眠れば眠るほどにたっぷり得るものがある」(フランス、13世紀のオード)。

### 中世の理想郷

「楽園の国では、眠れば眠るほどにたっぷり得るものがある」は、フランスだけでなく、まったく同じような詩がイタリアでもイギリスでも見つまっている<sup>iv</sup>。それは、中世末期とルネサンス期に西洋に広く普及した寓話であり、なかでも北イタリア、またフランドルからドイツにかけての地域ではよく知られていたようだ。Cocagne「楽園、享楽」という言葉は、「ものなりの豊かな地」と

<sup>ii</sup> 前ページの図参照。日本では『怠け者の天国』の題名で知られる。

<sup>iii</sup> 映画の原題は *Alexandre le Bienheureux*。怠け者の農夫アレクサンドルを主人公にした喜劇作品である。邦題は『ぐうたら万歳』。

<sup>iv</sup> 例えばイギリスなら次のような詩句になる：« In the Great Land of Cockaigne, / He Who Sleeps the Most Earns the Most … »

解釈でき、12世紀の文献『カルミナ・ブラーナ』<sup>v</sup>の詩歌222にはじめて登場したが、それが西欧の文学史上最初に描写されるのは、さらに1世紀後のことである。13世紀中葉に書かれた『楽園の国のファブリオー』では、その188行詩のうち156行がこの素晴らしい国の詳細な描写に割かれており、この理想郷の主たる特徴を述べる。楽園の国と中世のさまざまな驚異の物語は、その後、まだ見ぬ新世界を征服するという想像に彩られた黄金郷伝説に姿を変えるが、飢饉の時期には食糧備蓄が死活問題であったことから、楽園の国という主題は16世紀の文学および図像学において最盛期を見、17世紀後半になると姿を消していく。それら16～17世紀の文献については、歴史家ジャン・ドリュモアが、フランスで12編、ドイツで22、イタリアで33、そしてブリュッゲルの故郷フランドルで40編の異本を見出している。

歴史家ジャック・ル・ゴフは、楽園の国を中世における唯一の理想郷ととらえているようだが、その発想は中世的ということにとどまらない。実は、聖書の物語や古代の神話といった、さらに古い時代から汲んでいるのである。乳と蜂蜜が河となって豊かに流れるカナンは、神がヘブライ人に約束した土地だが、聖書においてはエデンがそれに相当する。それは地上の楽園であり、人は食べ物の心配をする必要もなければ、飢えも知らず、そもそも食べ物を得るために労働するという考えさえ抱かない。その地は、地理的に納得できるところ、つまり河や泉、森や園といった場所であり、自然が豊かで平穏な土地である。とはいえ、ものなりのよいその国は、聖書の精神や神学者の側からとらえると、この世の楽園とはいえない。そのような土地では、信者は享楽にふけてしまうからだ。創世記の物語が示すところでは「その地は青々とした草木をつくり、草はその種類に応じた種をもち、木々はその種類に応じて、種をもった果実を与え」(創世記 I, 12)、木々は枝をたわませて多様で豊かな食べ物をもたらす。土壌そのものから菓子やチーズが生じてくる。食べ物を過剰なまでに産するその地で、人々は肉を食べ、ワインを味わう。だが、神がノアとその子孫に肉食を許したのは洪水の後であったこと、そして洪水の後に一つの委譲がなされたこと、さらにそれが墮落という人間の条件へとつながったことを思い出してほしい。ワインはノア以前には未知のものだった。はじめてブドウ

---

<sup>v</sup> *Carmina Burana* : 中世の詩歌集。ドイツのバイエルン修道院で発見された写本で、11世紀から13世紀にかけて記されたと考えられている。歌詞の大多数は世俗的な内容である。

栽培を行ったのはノアであり、ノアこそが酩酊の最初の体験者だったのだ。楽園の国は、原罪によって人が被らざるをえなかった事柄を反転した形で提示しているのだから、実のところは反楽園なのである。たとえイバラの木に滋味深いブドウの房がなり、草原が美味しそうなガレット菓子からできていたとしても、そこにはむしろ、「あなたは一生涯苦しんで、地から食物をとることになるだろう。地はあなたのために、イバラとアザミをはやし、あなたは野の草を食べることになろう」（創世記3, 17-18）という恐ろしい宣告を読みとるべきなのだ。

楽園の国に描かれる理想郷はまた、寛大な自然の産物を大量に放出する豊穡の角<sup>vi</sup>を思わせることから、古代ギリシア、古代ローマにもその根源をもつ。古代ギリシア人が思い描いた彼らにとっての神話的時代、つまり戦いも病も苦しみもなく労働の必要もなかった「黄金時代」、人は神々のように暮らし、食べ物は、豊穡で寛大な自然の方から授けてくれたという。楽園の国は、そこから遠いものではない。同様に、楽園の国の発想が、若返りの泉の神話や、サモサタのルキアノスが『本当の話』（2世紀）のなかで描く幸福の島に由来することにも注目すべきである。また、クラテースの『野生動物』、テレクレイデスの『隣保同盟代議員』、あるいはフェレクラテースの『ペルシア人』など<sup>vii</sup>、紀元前5世紀のギリシヤ喜劇の独白や対話にもすでに、中世やルネサンスの楽園の国をうらやむ必要などまったくない世界が繰り広げられている。そこでは、焼き鳥に仕上がったヒバリが人々の口に落ちてくるし、スープの河は肉の塊を運び届け、魚は勝手に人々の家にやってきて自らを油で揚げ、会食者に食べてほしいと申し出る。木々の枝からは、エイナ島<sup>viii</sup>のガレット菓子や仔ヤギの胃腸の焼き物が降ってくる。楽園の国では、平和と自由、豊穡で多彩な食べ物、そして永遠の若さと賑わいといった、この世の幸福の条件がことごとく揃い、

<sup>vi</sup> ギリシア神話の中に、コルヌ・コピアイの逸話がある。それはゼウスが育ての親アマルティアに贈ったヤギの角で、それを手にする者に望んだものを与える力を宿すことから、「豊穡の角」と呼ばれる。ローマ神話の運命の女神フォルトゥナは、運命を操る舵とともにこの豊穡の角も手にしており、豊穡の女神ともみなされている。

<sup>vii</sup> クラテース、テレクレイデス、フェレクラテースは、いずれもアテネの喜劇詩人。アリストテレスは『詩学』でクラテースについて言及し、最初の喜劇詩人と呼んでいる（『詩学』第5章）。

<sup>viii</sup> エギナ島、アイギナ島とも呼ばれるギリシア領の島。肥沃な土壤をもち、古代ギリシヤ時代には、アテナイと拮抗するほどの繁栄と勢力を示す都市国家として知られた。

その地を覆っているのである。

楽園の国は、物質的側面からしてまさに理想郷であり、美味や性の自由といった身体の喜びに対する罪悪感が存在しない世界である。したがって「もの食う口」と色欲<sup>a</sup>についても、あえて追及されることはなく、労働や取引という概念も未知のものであるから、かりにひとつ牢獄が設けられていたとしても、それは働くという突拍子もないことを考える人間を閉じ込めるため、ということになる。なぜなら、自然はそれ自体が善きもので作られており、日々の営みに必要なものはおのずともたらされるからである。楽園の国とは、グルマンディーズ、性の快楽、そして安逸がいかなる批判の対象にもならず、ただただ充足して暮らすことのできる夢の国なのだ。思う存分食べ、申し分のない身なりをし、憂い一つなく、人は自らの喜びのみに導かれて、この国で生きるのである。

### 料理とワインで描かれる楽園の国

楽園の国の情景は、ファブリオー、詩、笑劇、絵画、彫版画、そして諷刺地図で味わうことができる。想像上のこの国ははるか遠く、行き着くのには困難をきわめるが、多くの場合、西欧のどこかに位置する島だと考えられている。その位置が具体的に示されないこともあって、ドイツの詩人ハンス・ザックスの「怠け者の天国」(1530)<sup>x</sup>では3里にわたるクリスマス・プディングを食べきったところ、ボッカチオの「歓びの国」(1350)ではフィレンツェから数百万歩以上進んだ場所、そしてフランドル地方の「楽園の国」(1546)においては長い夜を幾夜も過ぎてさらに3マイル先、というように面白おかしく表現されている。長い航海を経、あるいは目の前に立ちはだかる可食山を食べつつようやくたどり着ける地で、いったんそこをあとにしたが最後、再び来た道を見出すことはできない、ともされる。

その国には、山のように堆積した粥やトルテリーニ〔詰め物をした小さな指輪

---

ix 4世紀、「八つの悪徳」として、グルマンディーズがその第一の誘惑に、色欲が第二の誘惑に置かれたことから、「もの食う口」の罪と色欲は強く結びついた。拙稿『『グルマンディーズ』 - 翻訳と注釈 -』 pp.68-69 (『島大言語文化』第40号) 参照。

x 靴匠詩人と呼ばれたハンス・ザックスの韻文長編詩。「怠け者の天国」は、「家々がパンケーキで覆われ／ドアや錠戸は蜂蜜入りお菓子／床板や壁はベーコン・ケーキ／〔中略〕家々の垣根はこんがり焼かれたソーセージで編んである」と歌われている。

状の pasta], チーズなどの峰が連なり, 河川, 湖水, そして海はワインや乳をたたえ, 泉や井戸から湧いてくるのも水ではなく, ワインやマデラ酒, 蜂蜜酒である。草原にはビスキュイがはえ, 低木にはブドウの房がたわわ, 堂々とした木々は完熟した果実やすでに砂糖漬けにした果物を一年中実らせており, 小ぶりのミルク風味パン, 砂糖菓子, パテ, イワシャコや七面鳥のローストまでもがぶら下がっている。食卓は料理を満載して食客を待ち, 働き者の寸胴鍋は次々と食材を調理して, お代わりの用意に余念がない。

四つ足獣や家禽は, 早く食べてもらいたいといわんばかりに準備万端, パテと殻つき卵は自ら食客の前に登場し, 詰め物をされた小鳩とヒバリはほどよくローストされて通行人の口のなかに落下, 仔豚は美味しい骨付き背肉を食べたい人のために自ら背中にナイフを突き刺してのんびり道を歩む。河には, ゆで煮やローストなど, 100種類以上もの方法で調理された魚料理の数々が浮かんでいる。垣根や囲い, 柵, ぶどうを添え木に結びつける紐, さらに犬の綱やロバの首輪にいたるまで, 数珠状の大小ソーセージでできている。マルク＝アントワヌ・ルグラン作の三幕からなる喜劇<sup>xi</sup>には, 屋根がタルトやトゥルト, ゴフレットで覆われ, 壁は焼き菓子や肉, そしてスズキ, チョウザメ, サケ, ニシンダマシなど新鮮な魚でできているタルティエヌ夫人の宮殿が描かれているが, 善き王の住まいとなると砂糖づくりで, 円柱は大麦芽糖, 数々の装飾は砂糖漬けの果物だ。地下室でさえ美味, というのも, 城が建つ地殻からは, 砂糖や各種マスパン [アーモンドペーストを色付けし, 様々な形にした菓子] が採掘されるからである。

フランドルの楽園王国は, 春から夏にかけての気候が続いてくれるため, 毎日が5月のように穏やかな好天で, 香り高く心地よいそよ風が吹く。万一, この微笑の国の平穏を悪天候が襲ったとしても, 不安は無用だ。雨天といっても, おそらく温かいタルトやフランの雨であり, 嵐はドラジェ [色付けした糖衣をかけたアーモンド菓子] や砂糖漬け果物, また雪の日に降り積もるのは粉砂糖だろう。

### 楽園の国の味覚さまざま

楽園の国の寓話はヨーロッパに広く定着するものの, 地域色が存在してお

---

<sup>xi</sup> 1718年にフランス座で初演された『楽園の国の王様 *le Roi de Cocagne*』のこと。

り、そこに13世紀から17世紀までの各地域のグルマンディーズと、その変遷を垣間見ることができる。香辛料の嗜好は、中世の貴族料理を特徴づけるが、その時代の人々が想像した天国と結びついているため、14世紀中葉のイギリスおよびアイルランドの楽園の国には香辛料の香りが充満している。たとえば「目にも美しい」と描かれる一本の木は、根がショウガとカヤツリグサ、木の芽はガジュツ、花はナツメグ、果実はクローヴ、樹皮はシナモンでできており、さらに「きれいに下ごしらえされたヒバリが／クローヴとシナモンをふりかけられ／たっぷり煮汁を含んで調理されて／人々の口のなかに落ちてくる」のだから、なおのこと喜ばしい。スペイン版の楽園の国では、イスラム世界で想像されていた天国の影響を読み取ることができる。フランス版では、赤ワインと白ワインの河が流れており、赤はボヌのワイン、白はオセール、ラ・ロシェルやトネールのワインである。楽園の国を歌った15世紀のオランダの詩は、フランスのファブリオーに大きな影響を受けており、ワインの流れもさることながら、ビールの河も歌われる。

イタリア版では、ゆであがったニョッキが、大きな寸胴鍋のなかからすりおろしチーズの山の上に流れ落ち、リコッタチーズが川岸を縁どったり、輪切りのモルタデルソーセージに飾られた家々の壁を白く浮かび上がらせている。雌牛はまるまると健やかで、毎日仔牛を産むほどだ。ポッカチオは『デカメロン』の八日目第三話で、単細胞のカランドリーノが「この世の楽園」の至福に驚嘆する様子を茶化して描いているが、そこでは、マカロニとラヴィオリが去勢鶏のブイヨンでゆでられ、すり下ろしたパルメザンチーズの山の斜面を転げ落ちてくる。パルメザンチーズ山の麓には、ヴェルナッチャ種のブドウでつくった「一滴の水も混じらない正真正銘の最上の白ワイン」の川が流れる。16世紀のモーデナのある匿名の作家は、マカロニを一杯入れた大鍋を頂上にただく「すり下ろしチーズをすっぽりかぶった山」というように、喜ばしい人生の国を生き生きと描き出している。マカロニはほどよく煮えると（とはいえ、当時はまだ、パスタをアルデンテにゆでるべし、とはされていなかった）、大鍋からあふれ出て、山の斜面を転げ落ちながらその身にチーズをからめ、平野に美味しい流れを描きつつ、うまいものに目がない人たちの胃袋に届けられる。1606年のイタリアの地図（ミラノ、レモンディーニ・コレクション蔵）では、この噴火状態の大鍋山が、誇らしげに楽園の国の中心にそびえている。ゆで上がったパスタは噴火口からはき出され、おそらくソースがけのためだろ



うが、広々とした池に一旦沈み、その後、網を手にした人間にすくい上げられる。食べ物をこのように火山に見立てるやり方は、ドイツやフランドルでは見られず、イタリア版の楽園の国を特徴づけるものだ。ナポリの謝肉祭の際、次々と行列する山車のモチーフにも見られる発想である。

楽園の国の味覚の描写は、社会学的な興味もそそる。ブーダン〔豚の血と脂肪を、豚の小腸に詰めたソーセージの一種〕や数珠状のソーセージ、謝肉祭のこってりした菓子、また各種のアンドウイユ〔豚挽肉に、細かく切った豚の胃、腸など臓物を混ぜ、大腸に詰めたソーセージの一種〕が合戦している情景には、民衆らしさが色濃い。しかし、それは理想の国であるから、シャコ、キジ、ヤマシギなどといった鳥や新鮮な魚、小麦の白パン、ドラジェやマスパン、果物の砂糖煮など砂糖菓子も描かれており、富める支配階級への羨望も垣間見える。多種多様な食べ物とその浪費は、まさに貴族の食卓の特徴を反映し、それが楽園の国の隅々にまで行き渡っている。1546年にフランドルで描かれた楽園の国では、ローストした鶏の数が多すぎて、住人が垣根の上から投げ捨てるほどだ！楽園の国の料理には、民衆的祝祭の食べ物と支配階級の豪華なそれとが同居し、社会的混淆の趣を表現しているといえるだろう。宗教的にも社会的にも、また道徳的にも何ら禁止されることはなく、各自が好きなものを、自らの喜びに応じて飲んだり食べたりできる。蓄えは尽きることなく、質、量ともに、目に喜ばしい豊かな光景が広がっている。

### ローストと脂肪、美味しいものへの夢

ラテン語の語根 *coqus* は、ドイツ語の *koch* や *kuchen*、オランダ語の *kook*、英語の *cook*、フランス語の *coque*（つまりアーモンド風味の軽い菓子）などというように、料理や製菓に関するいくつかの語彙を派生させたが、それは「楽園」*Cocagne* という単語にも関係している。楽園の国が豊かな食の国であったことはいうまでもないが、それが他の感覚の喜びにつながっていたことも忘れるべきでない。食の領域は、16世紀以降、他の主題をしのぐほど強く前面に押し出されるようになった。ブリューゲルの絵画は、その主題をグルマンディーズと怠惰の満喫に限定して描く。つまり、楽園は多量と豊穡とを指すだけではなく、無頓着と安逸の同義語となったのだ。

楽園の国を描写する際、料理目録がこれ見よがしに披露されるため、人々はよだれを垂らし、頭のなかで美味しいもの一色になってしまう。1786年、ヴェ

ニスを訪れたゲーテは、大道芸の歌い手がこの素晴らしい国を披露しているのに立ち会っている。このように道端で歌われたり、祭りの大道芝居で演じられたり、あるいは夜の団樂で語られた廉価本に記載されたりと様々だが、いずれの場合にも、楽園の国の物語は人々の食欲を刺激し、関心をひくものでなければならなかった。『楽園の国への愉快的な旅』(1588)<sup>xii</sup>は「脂がのった美味しい肉に目がなく、不快、欠乏は大嫌いな方々」に宛てて書かれている。グルマンディーズの旅に、人々がこうもやすやすと誘惑されてしまうのは、脂がのった美味しい肉塊や過剰な食べ物とは反対の状況が現実だった、という事情による。日常的に脂が欠乏し、粗末な食べ物しか得られなかった当時であっては、美味の夢は脂肪への欲望なのだから、イギリスの『楽園の国』に登場するプディング(詩句59)は、これ以上ないほどに脂っぽく表現されたわけなのだ。脂肪は社会的権力、富、安逸な生活を示す。でっぷりした人は中世イタリアの町衆のなかでも権力者であり、「脂肪たっぷりの食卓」は豪華で幸せに満ちた食卓を表し、逆に「やせた雌牛」という言い回しは、不猟不作の年を意味した。恰幅のよさは、母親や乳母が幼い子供に求める丸くむっちりした肉のくびれと同じで、それだけで健康の標だと考えられた。楽園の国に登場する動物のなかでは、ガチョウが脂肪への欲望を象徴する。とりわけ肥えた家禽、脂がのったガチョウという風に形容されると、冗語法によって、脂がのったうえに脂肪分に富むことを示すため、それを読めば食欲はいや増す。加えて、脂ののった肉は鍋で調理されず、ローストされるべきである。なぜなら、ロースト、つまり炙り焼き料理は、蛮族の支配階級に継承された強者の食べ物だからである。ローストは、脂を一滴も失うまいとする鍋煮とは逆に、脂肪を惜しみなくしたたらせる。豊穡の理想郷においては、その住人である蛮族が脂肪の欠乏を懸念する必要など一切ないのだから。西欧キリスト教の世界において、豚は脂肪の表象であり、この動物が登場すればそれだけで、食べ物の豊穡を想像させるに十分だった。「豚はすべてによし」と諺にもあり、その血さえ黒ブーダンをつくるのに用いられてきた。もっとも、民衆はそれを十分に認識しており、今も田舎では、冬、豚を犠牲にする催しが残る。これは新鮮な肉を腹いっぱい食べられる数少ない機会の一つで、婚礼などの儀式と時を同じくして行われることがある。

---

xii 本拙訳p.66既出。

西欧の大多数の人にとって、日常の食卓には、雑穀の粥、黒パン、野菜や根菜のスープ、ブドウの搾りかすでつくった粗末なワインしかのぼらなかつたので、楽園の国では、とりわけ豚、ソーセージ、家禽など肉類のローストが並び、蜂蜜、タルト、ゴーフル、クレープなど甘味もそろったうえに、おびただしい量のワインがふるまわれる。料理の多様さ、質、量をすべて十分に満たしているのだ。ただし、この食べ物の楽園で排除された肉もあった。登場しないのは、特に貧民の肉とされたヤギ、臭い肉とみなされたオオカミやキツネ、不浄な肉とされた馬、犬、猫である。同様にカブ、栗、ドングリ、空豆、グリーンピースなどの野菜のゆで煮も、楽園の国に記される資格をもたない。それとは逆に、文献がこの国の料理として最高のランクに評価し、もっとも魅惑的だと強調するのは家禽や各種の鳥であり、現在も西欧が価値を置く食材である。シャコ、キジ、ヒバリ、ヤマシギ、去勢鶏、ガチョウ、鶏などは王侯貴族のための食材であったので、楽園の国ではせめて、万人がその味覚の世界で過ごそうというわけなのだった。出来立ての白パンでできた広場には、祝祭日の食べ物、あり余るほどの肉、てらてら艶めく砂糖菓子が並んで、ワインを吹きだす泉とともに楽園の国を描き上げた。

### 描かれるのは、民衆にとってのただの気休めなのか

楽園の国に描かれる食べ物、つまりワインと肉と脂肪は、ドイツでもイタリアでも、フランスでもイギリスでも、中世末期からルネサンス期に至るまで、謝肉祭で行われる四旬節の大斎、つまり断食との戦いに備えるためのものでもあった。楽園の国を理想としたのは、祝祭的時間の夢をいつまでも引き伸ばしたいという願いゆえなのだ。そこに挙げられた料理を思い浮かべることによって、人々は婚礼や豚の屠畜、また村祭の折に、たとえ一時でも夢の国に生きた記憶を反芻し、日常の粗食や単調で過酷な労働の日々に耐えることができる。

楽園の国の寓話を祝祭日と同一視する根拠として、「楽園の支柱」と呼ばれる町や村の祭で行われる催しを挙げよう。長い棒にあらかじめ油をぬってすべりやすくしておき、てっぺんに食べ物や飲み物が入った瓶を吊り下げる。この棒になんとかよじのぼろうとする努力は、楽園の国に至るまでの厳しい旅を思わせ、豚の腿肉や脂がのったガチョウ、数珠状のソーセージがそこにぶら下がる様子は、楽園の国の木々に実るこの世のものとは思えない種々の果実を想起させる。五月祭でよく見られるこうした支柱は、16世紀のローマでも使われた

ようだ。『パリのある町人の日記』は、1425年、サン＝ルーおよびサン＝ジル小教区の守護聖人祭でこれらの支柱が立ったと記載している。この日記には「6トワズ<sup>xiii</sup>ぐらいの長い棒を地面にまっすぐ突き立てる。その高い先端には籠がつけてあり、なかにガチョウの脂肪と6枚の硬貨が入れてある。棒には聖油が塗られている。なにも使わずに棒を上までよじ登る者は籠のなかのガチョウの脂と硬貨を得ることができると、声が上がった」と書かれてあり、「楽園の国を与える *donner une cocagne*」という表現も見られるが、それは人々に喜びを与えるという意味で理解できる。その後「楽園の支柱」が民衆の素朴な娯楽と化すと、この表現も次第に本来の意味を失い、今では単なる言い回しとしてしか残っていない。

しかし、この理想郷の裏には、カトリック教会がとりわけ食べ物に関わって道徳的拘束を課し、悔悛を求め、暦上の大斎と小斎を遵守すべきと強いたことに対する、暗黙の異議申し立てが潜んでいると考えられる。『楽園の国のファブリオー』に描かれる一年には、日曜日と祝日だけしかなく、したがって労働というものも存在しない。しかも一年に四回の復活祭があり、サン＝ジャン祭<sup>xiv</sup>もロウソクの祝別日<sup>xv</sup>も、四旬節直前のマルディ・グラ（謝肉の火曜日）と謝肉祭も、万聖節もクリスマスもブドウ収穫祭も、それぞれ同様に年に四回ずつある。一方、四旬節は20年に一回、15世紀オランダ版の『楽園の国』では一世紀に一度だけしか訪れず、しかもそこで大斎と呼ばれるのは、魚も肉も食べただけ食べられる日ということになっている！やがてこの風変りな暦は異本に見られなくなるが、楽園の国と謝肉祭あるいはマルディ・グラの同一視は、16世紀から17世紀のさまざまな文献や版画にたびたび看取できる。『謝肉祭の出発』（1615）では、楽園の国を、謝肉祭の時期が人々の都合に合わないときに訪ねていける保養所として描いているし、18世紀前半、特にナポリでは、謝肉祭の行列に食べ物を一杯に積んだ山車が参加することもあった。

こうした当時の人々の異議申し立ては、人々に罪悪感を与えた教会の言説に対してもっとも強く、明確に打ち出される。楽園の国が最初に描写され、広く知られていったのが13世紀であり、教会が七つの大罪への憎悪を信徒に叩き込むようになった時期もそれと重なるので、このことは、無視されるべきでは

<sup>xiii</sup> 長さの単位。1トワズは約1.95m。6トワズは11.7メートルになる。

<sup>xiv</sup> 聖ヨハネの前夜祭。夏至の頃に火祭りが行われる。

<sup>xv</sup> キリスト奉献を祝う2月2日。聖母マリア清めの祝日でもある。

ない。また、謝肉祭と四旬節の戦いがはじめて文学的に表現されたのも13世紀だったことも記憶しておきたい。『楽園の国のファブリオー』の最初の詩句に、語り手である旅人が、教皇の命によって素晴らしい国から追放の罰を受けたと告白していることから、宗教の強い影響は明らかである。そもそも、楽園の国はエデンの園とは逆の状況を示し、そこから七つの大罪を締め出し、このうえなく物質主義的な地上の幸せを称揚する、というものだ。このキリスト教的価値の完全な逆転において、重要なことはただ一つ、肉体的充足である。ところが、楽園の国が次第に謝肉祭的な主題と同一視されていったため、宗教を問題とする疑義は薄まっていった。

楽園の国という寓話が、民衆の間で何世紀にもわたってさまざまな形で表現された理由は、つまるところ、飢饉等による食の欠乏という危険性を消滅させえなかった社会への失望と不安である。想像上の世界であるにせよ、楽園の国は、現実から逃れる機会を民衆に与えたのであり、食の困窮に対する人間的代償なのである。その意味で、楽園の国を「貧乏人の天国」と形容したイギリス人の発想は、説得力をもつ。楽園の国は、多くの食べ物に溢れ、明日を心配する必要もなく、貴族的浪費ができるという要点で定義可能だが、それ以上に、充足されるべきでありながら決定的敗北に終わってしまう腹ペコの夢といえるのだ。楽園の国では、自分がほしいものを、望むときに望む場所であんまりするほど食べられる。食べ物の蓄えを懸念せざるをえない社会では、楽園の国の寓話がさまざまな文学作品の生成に関与し、それらの作品のおかげで、空腹をしばし忘れることができるのだ。散文で書かれようと韻文であろうと、溢れんばかりの料理、過剰な食卓、酩酊の陽気さをこれでもかと表現するグロテスクで滑稽で酒びたりの文学は、直裁に表現された大宴会の夢によって、その時代の人々が直面せざるをえなかった食への失望を補う。同じ意味で、文学作品、絵画、版画を通して、一時であれ楽園の国を味わえば、それが一つのはけ口、精神的な償い、うっぶん晴らしに役立ち、日々口にせざるをえない粗末な食べ物、引き続き小斎日、食べ物不足への不安、収穫時期を迎えての穀物価格への懸念を、しばし払拭してくれるのである。ここまで、楽園の国への旅が表現する精神的機能を考察してきたが、この民衆の切実な状況を、現実に腹いっぱい食べることできた支配階級が理解することはなかった。

### のらくら者や犬食い、卑劣漢が住む不愉快な王国

民衆がこの理想郷に強く惹かれたので、楽園の国は「もの食う口」の罪と色欲を激しく批判する人々に、ますますつけこまれることとなる。彼らには、そこに見られるグルマンディーズ、怠惰、そして色欲へと走る人生が、まさに悪魔的なものと思えたからである。こうした状況はかなり以前から存在した。というのも、すでに14世紀初頭、『楽園の国』の寓話は作法の一般的真理と照合されて、当時のアイルランドのシトー修道会内のゆるんだ道徳を諷刺するのに使われているからだ。その後、楽園の国は、ゲルマン系文化圏においては、馬鹿と狂気の世界に結びつけられる。フランドルの画家ヒエロニムス・ボスは『愚者の船』(1490年頃)で中央に楽園の木を植え、セバステリアン・ブランド<sup>xvi</sup>作の同名の諷刺詩集(1494年刊)第108篇に登場する阿呆どもは、海図も羅針盤ももたないまま、ありもしない国を求めて出航し、ただ戯言を口にするばかりだ。その船にのる者には不幸が討ちかかり、阿呆どもは笑い歌いながら、地獄へ向かう。18世紀、ホーマン商会で印刷されたドイツの諷刺地図には、地形図の上に胃の帝国、金の仔牛<sup>xvii</sup>の王国、酒の国、色欲の共和国、のらくら者の縄張り、冒涇の都などといった地名が記され、快楽に溺れる放蕩者が陥る危険をうたっている。15世紀末、クリストファー・コロンブスは、カトリック両王に宛てた手紙でイスパニョーラ島を説明するのに、まさに楽園の国の紋切型の特徴を並べあげ、「それはこの世でもっとも自堕落な人たちのためにできた土地である」と書くが、それはカトリック教徒である彼らが道徳的な面で、かの地に住む人々の慣習を承認しがたいものとみなしていたからである。

このように、楽園の国という主題はきわめて二律背反な面をもつため、暗示に富む地名や滑稽な響きの名前、あるいは教訓めいた言葉一つ付け足すだけでも、その寓話に多様な意味が与えられてしまう。楽園の国へと至る道程が「ごろつきが通る道」と名付けられたり、その国を目指す旅人を迎える宿場が「のらくら宿」と呼ばれたりするのも、こうした理由からだろう。お気楽な聖者ラーシュ Lasche は、「無為で、あてもなくさまよい歩き、怠惰で、のらくら者」であるため、この国の守護聖人に昇格した。確かに、この風変りな王国で

<sup>xvi</sup> 1458-1521。ストラズブル出身の人文学者。ルネサンス期において、当時最も優れた文学作品のひとつである諷刺詩集『愚者の船(邦訳では『阿呆船』)を著す。

<sup>xvii</sup> 『出エジプト記』の逸話の一つで、イスラエルの民がつくらせた偶像。物質崇拜を表すと考えられる。

は、どれだけのらくら者であるかの程度に応じて、騎士や伯爵、王子あるいは王の座につくことができる。支配階級の名称と肩書きは、何が諷刺されているかを明示し、怠惰と大食、そしてそれらを容認する姿勢を糾弾しようとする。のらくらで大食な御仁は、文字通りパニゴン（イタリア語でパニコーネ、つまり大食い）と命名され、「戦いの先導者という理由からではなく、底抜けの意気地なしであるから」こそ、楽園の国の王冠をいただく。フランスの版画「楽園の国、その豊かさの描写」（16世紀末～17世紀初頭）には、この王の姿が詳細に描かれている。それでは、楽園の国の女王は、というと、こちらも「敬うべきふぬけの奥方」の優雅な名前に恥じていない。1546年のフランドルの異本は、甘美で怠惰な楽園の国に赴くためには「あらゆる徳、信望、礼儀正しさ、才知と技能」を捨てさえすればよい、と述べている。しかし、あらゆる悪徳の母である怠惰には警戒しなければならない。その楽園の国は、陰気な絞首台のすぐ近くに位置し、この詩が向けられた迷える子らに、罪を予告しているのだから。

楽園の国はこうして、あらゆる種類のごろつき、怠け者、犬食いがごろごろと寝転がるとんでもない世界、糾弾されるべき輩の地になりはてることによって、もう一方のしかるべき国を引き立てる。肥満した大食漢は寄生虫でしかなく、脂を蓄え、仕事を嫌い、社会の自然な秩序を危うくする忌むべき消化管にすぎない。そのものの見方とはまったく裏返しの世界観を表現するマルディ・グラが、楽園の国に亡命しているのは偶然ではない。楽園の国という夢の背後に、食べ物に対する不安感を紛らわしたい民衆の思いがあることを嗅ぎとりながら、教育学者や道徳家はそれに気づかぬふりをして、美味しいものを口にしたいという思いを怠惰と紙一重であると関連づけてしまった。グルマンディーズはこうして、労働に汗水たらすことを拒否し、商取引を拒むという点においてきわめて危険な怠惰と同一視されたのである。ヨーロッパ前資本主義社会において、意義深いとされた労働に関わるさまざまな資質に対して、グルマンは排除されるべき対象だ。だからこそ、楽園の国へと追放されてしまうのである。

楽園の国は、若者の反面教師という解釈によって、今度は教育論にとり上げられるようになる。フェヌロンがルイ14世の孫であるブルゴーニュ公の家庭教師の職にあったとき、王太子を感化するためにさまざまな寓話を書いたのも、それが理由である。『快樂の島への旅』と題した物語では、作者は自らが完璧なまでに知っている理想郷のコードを駆使しつつ楽園の国を諷刺し、味の

快樂を追及することの虚しさ、快樂が大きく影響したために人の性格が柔弱になってしまうことを糾弾した。こうした主題は、同作者の『テレマックの冒険』(1699)にも見られる。『快樂の島への旅』で、語り手である主人公は長い航海を経て、甘い菓子でできた甘いものづくしの島にたどり着く。岩はキャラメルと氷砂糖でできており、山はコンポート、川にはシロップが流れ、森はレグリス〔甘草の根液の飴〕、木々はゴーフルで覆われている。年若い王太子は、この物語に心奪われたにちがいない。しかし、旅する主人公は、いつも手の届くところにあるこれらの甘味にすぐ飽きて、より香辛料を効かせた料理、いわずもがな、より男らしい料理を望むようになる。こうして、主人公は「砂糖の島」を去り、「胡椒が効いた豚腿肉とソーセージのラグーの鉱山」がそびえる豊かな島に向かう。そこで彼は、一日に十二のご馳走を食べるのに十分な食欲を備えもつため、食欲商人から、胃袋代わりの12個の小袋を買うのだ。が、その夜、「自分の秣の前から動かない馬のように、一日中食卓で過ごすことにうんざりして」しまう。すでに述べたように、ここには大食漢と動物との同一視が見られる。次の日、主人公は、味わうのは美味しい匂いだけにしておこうと決意する。そのまた翌日、彼は風変りな町を訪れる。そこの住民は「いたずら好きで移り気な望みの精」を飼っているため、「どの人も自分が何かを望んだ瞬間、その望みがかなえられてしまう」。しかし、そのような召使を従えるうちに、みな怠惰で無気力になり、心地よいことばかりを追い求め、その挙句、なにごとにも柔弱で雄々しさに欠けることになり、ついには島の統治を妻に任せる始末である！若い王太子に宛てたこの寓話を、フェヌロンは、次のような教訓で締めくくった：

私は次のように結論を下した。感覚の喜びというのは、それがどれほど多様で、どんなに気安いものであろうと、人の品位を落とし、人をいささかも幸せにはしない。したがって、実に甘美な外観を見せてはいた国々ではあったが、私はそこを立ち去ったのである。そして故郷に戻ると、生活を簡素にし、節度をもって仕事に就き、品行方正にして、徳と幸福と健康を實踐して日々を送った。それは、かつて旅するなかでの、美味な食事とさまざまな快樂の日々においては、手に入れることのできないものであった。



(第二章終わり)